

デカルト以前の時代

大多和 明 彦
(平成2年9月26日受理)

The Age before Descartes

Akihiko OHTAWA
(Received September 26, 1990)

1. 序

通常の哲学史によれば、デカルトはまずもって、古代以来それぞれ別個に発展して来た幾何学と代数学とを統合して解析幾何学を構想したということになっている。そして、この新たな数学を基礎に、すべての対象を単に延長するものとして、つまりは、生命なき単なる物体として把握して、従来の言わば星占的な神秘的物活論的自然観から完全に脱却し、気象学、屈折光学を構築した、かくしてデカルトは、近代の合理主義の始祖となった、というのである。言い換えれば、彼は、単なる便法としての方法論的懐疑から出発して、絶対に疑うことのできない「我思う、ゆえに、我あり」という有名なコギトの命題を発見し、ここから、欺くことのない神が確かに存在することを証明し、これによって物体もまた存在することを確保して、計算する精神とそれに捕捉される自然という、近代的科学技術の根本にあるいわゆる主客対立図式にたどりついた、こうして、デカルトは近代合理主義的自然学を構築したというわけである。なるほど後代のわたしたちから見れば、それはその通りで、だからこそ、数年来喧しくなっている近代の超克というテーマのもとでは、広島も水俣もそしてチェルノブイリもそして地球環境の悪化もみな、科学技術の根源を設定したデカルトのせいだというわけで、彼は超克されるべき悪の張本人として、言わば指名手配されるということになる。

確かに、デカルトが近代の合理主義的自然科学の基礎を築いたということは、わたしたちの生きる今の時代から見れば、否定しがたい事実である。しかし、こういった御定まりの哲学的な見方は、デカルトが、自分の生

きた時代とは無関係に、いきなり合理主義精神をもって生まれ出たとも言えるようなものだ。そしてなによりも、デカルトは、自分の死のおよそ350年後のことまで見通す必要があったというようなものだ。わたしたちの責任はいわば末代にまで及ばなければならないのか、これはむずかしい問題である。もしも彼がこのデカルト悪人説を聞けば、彼は「そのようなレッテルは後代の君たちがかってに付けたものだろう、わたしはただたんにわたしの時代を精一杯生きただけだ。原作者たるわたしよりも後代の諸君らの方が、わたしの作品をより良く解釈するという解釈学的な進歩思想とやりに、諸君らは執り着かれている」と言うかもしれない。

現象学の創始者エドムント・フッサールは、「事柄それ自体へ！」と言い、一切の偏見を抜き去って事柄そのものをひたすら見つめることの大切さを強調したが、これを実行することは、これを単にスローガンとして理解するほどに簡単なことではない。フッサールがいかに艱難辛苦してこれを実行したか、当時の彼の速記ノートを目でも見ればわかることだ。そしてまたわたしたちが「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」というわたしたちの陥りやすい事態から、はたしてどれほどに自由になりえているかを振り返ってみれば、わたしたちがフッサールにならって「デカルトそれ自体へ！」と突き進むことがいかに困難なことであるか、そして、彼の懐疑を彼の単なる便宜上の問題として片付けてしまうことが、いかにわたしたちの陥りやすいアポリアにものに見事に陥っていることか、これは見やすいことだ。とすればわたしたちは、デカルトをただ単に悪人に仕立て上げてアンチ近代を叫ぶ安易なローマンチズムに陥る事なく、すなわち、落着いて明らかに考えようとしめない単純な反逆者気取り

の英雄主義の民に落ち込むことなく、まずは、彼が必死の行いの中で獲得しいわば体得した「懷疑そのものへ!」と切迫しなければならないのである。

なるほど彼の理論構築は懷疑から出発していると言うのは正しい。しかし、ゴータマ・シッダルタが生まれてすぐに「天上天下唯我独尊」と言ったということをだれも信じないように、わたしたちは、デカルトがいきなり懷疑からその人生を開始したということを信じる必要は毛頭ない。ゴータマがいきなりブッダになったのではないように、ルネもまたいきなりデカルトになったわけではない。「わたしたちは誰でも皆、大人になる前は子供だった」(『方法序説』第二部)とデカルト自身が出ている。彼もまた、その哲学体系を構築して押しも押されもせぬ確信に満ちた一人前の大人デカルトとなる以前には、不安に揺れ動きながら懷疑する青年デカルトであったのだ。そしてそれ以前は、身の回りの大人たちの言うことを素朴に信じる従順な子供ルネであった。子供の素朴な受け身の確信から懷疑する青年を経て、何事があるともはやびくともしない堂々たる大人へとというプロセス、それは、「正確に近道に戻ってくるためにどうしても歩み切らなければならないとんでもない回り道」(E・アルビー・『動物園物語』)にはかならない。これを経て始めてわたしたちは、どのような風が吹こうとそれをしっかりと受け止めて天空に舞う風のように、真に徒手空拳の勝負をする大人となることができるのである。彼の奇妙ともいえるほどに徹底したあの懷疑は、柔順な子供から「とんでもない回り道」を経て大人へと至る精神の遍歴の過程に生じたものだったのだ。

ところでデカルトは、当時の学術用語であるラテン語によってではなく、話し言葉であるフランス語によって『方法序説』を書いた。そしてその話し言葉を用いた理由を、「生まれつきの理性のみを用いる人のほうが、昔の書物しか信じていない人々よりも、わたしの意見をいっそう正しく判断してくれるだろうと思うからです」と述べている。わたしもまたこのデカルトのひそみに習って、「書物しか信じていない人々」に対してよりも、「生まれつきの理性のみを用いる人々」に向かって語りたいと思う。この一心でわたしは学部や短期大学の学生を相手に講義してきたのであり、難解な言葉はできるだけ使わないように、しかも何とかわたしの考えるデカルトのイメージを理解してもらおうと、悪戦苦闘してきたのだから。わたしは、哲学がすぐ難しい言葉を使いた

がる人々にとってよりも、ただしっかりと考えて生活しようとしている人々にとってこそ必要なものだと思う。しかも、しっかりと考えるということは、いたずらに難解な用語や横文字を用いることによって決してなされないのであって、生き生きとした「国の言葉」によらなければならないのだ。

なおここでは紙幅の関係上、本論の第1章『デカルト以前の時代』のみを掲載した。第2章は『デカルトの時代』と題され、ルネッサンスとバラ十字団について述べ、さらに、若きデカルトの足跡について語られる。第3章は『表象の自律と他律』と題される。ここで、デカルトがその時代精神の中から、それを引きずりながら、いかにして新しい時代精神を切り開いて行ったのかが、『方法序説』、『省察』等をもとにして見届けられることになる。わたしのこの講義録は、言いかえれば、デカルトに関するわたしの物語は、こうして、デカルトという人間を通して、近世という時代がどのようにして中世の桎梏から脱出し開始されていったのかをわたしなりに把握して、一応その目的を遂げることになる。

デカルト以降ヨーロッパの歴史は、彼の引いた路線をさらにラディカルに突き進んだ。それは啓蒙期のカントによる『コペルニクス的転回』とヘーゲルによる『絶対精神』の全面的展開を経由して、ニーチェの『超人』へと至って行く。この間に、デカルト哲学の内に有ってその表象を背後から隠れつつ支えていた神はついに殺害され、人間はもはや神の支えを必要とはせず、まったくの言わば独り立ちをするようになる。ヨーロッパの時代精神は、デカルト哲学から大きく変質し、彼から遠く隔たって、近代(モデルネ)の終焉へと突入するのだ。近代とは何であったのか、つまりは、近代の終焉と言われる時代に生きるわたしたちとはいったい何であるのか、このことを理解するためには、こういった紆余曲折の過程をつぶさに見て回ることが必要になるだろう。わたしのデカルトに関するこの物語りは、こうした目論みの一端なのである。

わたしの根本の目的は、今や破綻を見せ始めて来ているヨーロッパの近代的精神に対して、わたしたちの伝統的な東洋の精神が、とりわけ、ブッディズムの精神がどのようにコミットできるかを探ることにある。しかしこの問題は、全く別の仏教哲学の講義において展開しなければならないだろう。

さてでは、前置きはここまでとして、デカルトの「懐

疑そのものへ！」と差し迫って行くために、まずは彼を時代の中においてみることにしよう。

2. 闇の中を一人行く

デカルトが生まれたのは1596年3月31日のこと。いわゆる法服の貴族の家柄であったが、ここでは細かい詮索はひとまずどうでもよい。とりあえず、彼が当時日の昇る勢いの家柄に生まれたことだけを、わたしたちは確認しておこう。後に述べることになるが、このために、彼は生活に困らないだけの遺産を手にいれると同時に、いやおうもなく時代の政治情勢の真っただ中に投げ入れられることになる。

ヨーロッパの洗礼受付の帳簿は、わたしたち日本人の場合で言えばさしずめお寺に保存されている過去帳のようなものであろうが、これを当時にまでさかのぼって調べてみると、彼の母は彼の弟を産み落として間もなく、すなわち、1597年5月13日に亡くなっていることがわかる。しかし、デカルトはある手紙の中で、母は、弟をではなく自分を産み落として間もなく他界したと書いている。デカルトがうそを書いたのだとすれば、彼の親族が彼に誤って教えたものだろう。あるいはデカルトがうそを書いているのだとすれば、そうせざるをえなかったなんらかの理由が、彼にはあったわけだ。いずれにせよ彼の手紙の文面と教会関係の調査との間に整合性を見いだすことはできない。少なくともわたしたちは、彼がまだ乳飲み子であった時代に、彼の家系に何か不穏な暗雲めいたものがあったのでは、と考えることはできない。ともかくも、デカルトが母親の愛情をその体いっぱいを受けて育ったのではないことは、はっきりしている。

母親をはやく亡くしたため、デカルトは乳母によって育てられることになる。そして彼はこの乳母を、一生涯大切にしたのだった。「平和時においても続いて王国に磨きをかけ、文化的にも洗練させようという偉大な企てを抱いていた」スウェーデンの女王クリスティーナ（シャルル・アダン 邦訳・『デカルトと女性達』・石井忠厚訳・未来社 p143）の熱心な招きに応じて、デカルトは1649年10月、「冬の間は人間の思考も水と同様に凍結する」（同上書 p162）と思われるストックホルムにたどり着いた。そして彼は翌50年の2月11日早朝、肺炎のため、54年の人生を閉じるのだが、その12日前の2月9日、兄弟たちにあてて最後の手紙を口述筆記した。この

なかでデカルトは、自分の死後も彼女にたいしてこれまでもと同じく毎年年金を支払ってくれるよう頼んでいる。乳母は彼にとって、文字通り終生忘れえぬ人であった。

上に引用したシャルル・アダンの《デカルト — その女性との友情》（邦訳・『デカルトと女性達』・石井忠厚訳・未来社）によれば、デカルトは10才までの幼年期を、裁判所司法官の妻であった母方の祖母、ジャンヌ・サンの家で過ごしたのち、ラ・フレーシュの学院に送られた。この学院は、中世を支配したバロア朝に代わり、近世フランスの開幕を告げるブルボン絶対王朝の基礎を築き上げた当時のフランス王・アンリ4世（1553～1610）によって創設されたものである。彼は1604年、反宗教改革の先鋒を担っていたイエズス会にラ・フレーシュの地の自分の邸宅を与え、貴族の子弟の教育を任せたのである。デカルトが祖母のもとを去ってから以降8年間、18才になるまで修業時代を過ごすことになるのは、この王立の学院であった。後年デカルトは、この学校を懐古して次のように語っている。

わたしは子供のころから書物による学問によって育てられてきました。そしてわたしは、書物による学問によって、人生に有益なすべての事柄に関するはつきりとした確固たる知識を獲得することができると確信しておりましたから、そういう学問を学ぼうという強い意欲を持っておりました。…しかもわたしの居たところは、ヨーロッパでももっとも有名な学校の一つに数えられ、そこに居た当時わたしは、もしこの世のどこかに学識ある人がいるとすれば、それはまさにこの学院にこそいるはずだと思っていたのです。（『方法序説』第一部、傍点筆者）

ここでデカルトは、「学問によって神との合一による静寂を獲得することができる」などと語ってはいない。それは中世の神学者のせりふではあれ、デカルトのせりふではけっしてない。そしてまた、彼が抱いた「確信」（アシュランス）は、ルターやカルビンの求めた信仰の確かさといったものでもない。それは、レフォルミストが求めたような彼岸的なものではなく、もっと地上的なもの、この世的なものだ。即ち、この世での人生に「有益な」、すなわち、「役に立つ」確固たる知識を学問によって獲得できるのだという確信を、彼は抱いたのである。こういうアシュランスは、なるほど柔順な子供の抱

いたものではあったが、デカルトは、青年期を経て堂々たる大人になってからも常にこれをかえてはいない。彼は、この世での「人生に有益で役立つ確固たる知識を得ようとする強い意欲」を終始持ち続けた。それはデカルトの生涯を貫いている根本基調であった。彼が上の引用文の少し後で次のように語っているのを見れば、このことはさらに明らかである。

わたしは自分の行為をはっきりと見、確信をもってこの人生を歩いていくために、真と偽を区別することを学びたいという切なる願いを、絶えず抱えておりました。（『方法序説』第一部、傍点筆者）

わたしたち現代人は、上に見るデカルトの願いの切実さをおおうにして実感しそこなう。というのも、彼の「切なる願い」の裏にはこの時代を生き抜いて行く際の危うい不確実さが潜んでいるのだが、あまりにも安全でシュミレーションさえ成り立ってしまうほどに見通しのきく人生に慣れすぎたわたしたちは、この危うさを見損ない、そこから、「切なる願い」という言葉をデカルトの大袈裟な誇張した表現と誤解してしまうからである。しかし、彼の文章は、おおそ誇張とは何の関係も無い。それはむしろ、まことにシンプルな淡々としたものだ。したがってこの「切なる願い」という文句も、そのまま字句通りに受け止められなければならない。彼は真偽の区別を知って、確信をもって人生を歩いていきたいと、「強い意欲」をもって「切に願って」いるのだ。

わたしは闇の中を一人歩く人間のように極めてゆっくりと進み、すべてのことに周到な注意を払おうと決心しました。このためわたしはほんのすこししか前進しませんでした。すくなくとも転ぶことだけは免れることができたのでした。（『方法序説』第二部）

上に見られる文章もまた、「判断を誤れば、すぐにその結果によって罰せられるほかないような」（『方法序説』第一部）危うさが、彼に切迫し殺到してきていることを念頭に置かないかぎり、その真意を捕らえ損なうことになる。「闇の中を一人行く」とは、彼の実感だった。決して誇張ではない。ただ来し方を思い、正直に語っているだけだ。すべてのことに周到な注意を払いながら、闇の中を一人行く人のように……。深い闇の中でデカル

トのまなこがきらめく、ピンと耳を張った狼のまなこが暗闇に光るように、オランダ各地を転々と住居を変えながら「良ク隠レルコトガ良ク生キルコトダ」とつぶやいていたデカルトの異常とも思える用心深さ、これが時代の中を生きる彼の生きかたなのだ。

3. コントラストの時代

デカルトの生きた時代、それはほぼアレクサンドル・デュマの名作「三銃士」に描かれている時代である。デュマが、腰に長剣を吊し拳を握り締めた騎士・ダルタニャンを、駄馬にまたがったドン・キホーテーさながらに登場させるのは、デカルトが31歳のころ、即ち「1625年4月の第1月曜日のことである。…（ダルタニャンを見て）マンの町は大混乱であった。多くの町の人は、女共が大通りのほうに逃げるのを見、子供がわんわん戸口で泣き叫ぶのを聞いて、あわてふためいて鎧を着込んだ。そして、またどうやら尻込みする気持ちを、てんでの火縄銃や槍で威勢をつけて、旅館フランムニエの方に駆けつけた」と、デュマはこの名作を書き出している。

さらにデュマによれば「そのころ騒動はいっこう珍しくはなかったのである。…領主間の争いもあったし、国王と枢機官との紛糾もあり、スペイン王と（フランス）国王との戦いもあった。なお、こういう内乱や国と国との争いのはかに、人民の日常を脅かしていたものは、盗賊、ゆすり、新教徒、狼、無頼の従者などである。町の人はその泥棒、狼、悪僕を追い払うために一々武器をとったのだった」（アレクサンドル・デュマ『三銃士』生島遼一訳・岩波文庫（上）p 17）

要するにルイ13世（在位1610～1643）とその宰相リシュリユ（1585～1642）の時代、即ちデカルトの生きた時代、ヨーロッパの大陸では至る所戦争が絶え間なく行われており、その上、殺人、強盗、かっぱらいのみならず、狼さえもが人々を脅かしていた。「赤頭布ちゃん」の恐怖は、まだ現実のものだったのだ。こういったヨーロッパの時代様相を我が国に引き付けて言えば、ポルトガル伝来の火縄銃「種が島」が火を噴く中、信長が人生を下天の夢として一気呵成に駆け抜けていった戦国時代の様相に類似しているといえよう。

昼と夜との区別さえあい昧になってしまったわたしたちの時代とは違って、このころは、まだすべてがくっきりとしたコントラストを示していた。静寂に包まれた夜の闇はどこまでも深く、恐ろしく、他方、喧噪に包まれ

た祭りの一日はどこまでも明るく華やかだった。また、富めるものと貧しきもの、それはまさに天と地の違いだった。乞食達が吹きすさぶ極寒の風に身を寄せ合いながら眠る一方で、富めるもの達は、毛皮飾りのついた衣装に身をくるみ、明るい暖炉部屋でワインを傾けながら、例えば、当時流行の望遠鏡の夢を語り合ったことだろう。町では子供達が元気に走り回中、大きな尻をゆすって歌でも歌いながら洗濯をする女達のかたわらを、ぼろを纏った癪病患者の行列がガラガラと鈴を鳴らしながら行きすぎたことだろう。健康のかたわらで、病は明確で残酷な姿を呈していたのだ。

癪病もさることながら、この時代、ペストの猛威は言語を絶していた。ポール・フォールによれば（赤井彰訳『ルネッサンス』白水社 p 47）、黒死病の流行によって1576年ミラノに死者、約15,000人。1580年にはジェノバで28,000人。フランスの年代記作者エトワール（1546～1611）は、「伝染病は危険どころか恐怖であった」とその日記に記している。（同上書49ページ）生はまさに死と隣合わせであったのだ。現代と違って、伝染病は防ぎようがなかったのである。

少し抽象的に言うと、いまだ完全には近世とはならず、中世を引きずっていたこの時代にあっては、今という時が単に今の中に収斂してしまうのではなく、今が常に未来を含んでいたのである。すなわち、今の中に未来がはっきりと入り込んで来ていて、未来と共に始めて今が捕らえられている時代であった。これに対してわたしたち現代人にあっては、今現在の生は、単に今にだけ没入して、時は単なる今の変わらざる延長としてとらえられてしまう。その結果、エスカレーター式の人生のシュミレーションさえもが成り立つことになっているのだ。しかしこの中世を引きずる時代にあっては、今にあって常に今の消去を、すなわち死を、念頭におかざるをえず、今という時は、これとは全く異質の未来という時によって支えられ、把握されていたのである。つまり、今の生の喜びは、常にこの時代、未来の死の恐怖と隣合せなのであった。死は生のゴールであり、この限りで、死は生の目標なのであった。死のために生はあった。言い換えれば未来のために、今があったのである。

生は、なるほど、さまざまながらみに縛られており、なかなか思うようにはいかないものだが、それでも、今のひとときをどのように過ごすとするか、たばこを吸うか、畑を耕すか、この程度は己の意のままになるもの

である。この限りで、生は言わば思いのままになる主観性の領域に属しているといえることができる。少なくとも構成可能な領域が今の時には残されている。

これに対して死は、例えば、中世以来この時代に至るまで猛威を奮ったペストは、それがいつ襲って来るのかさえも予測することはできない。この意味で聖書には、主は、夜、強盗が来るように来る、と言われているのだ。なるほど死を計画すること、すなわち自殺を図ることはできようが、それは死のいわば主観的な企画化であって、到底自然な死とは言えない。この場合自然な死とは、なにも病死とか天寿を全うしての死を意味するばかりではなく、戦死とか事故死とかの不慮の死をも意味することができる。すなわち主観的な企画化ではない本来の自然な死とは、一切己の意のままにはならない出来事なのである。

己の意のままにならない出来事に出くわすこと、これに遭遇すること、これがショックということの正確な意味である。ショックとは、己の意のままにする企画化の反意語にはかならない。中世とそれを引きずっていたこの時代が、コントラストの時代であったということ、すなわち、現在の生が常に未来の死を含んでいたということは、言い換えれば、中世的時代がショックの時代であったということだ。この時代、人々は、あたかもぼんごの古自動車に揺られるように、今を生きながら常に、未来からの激しい振動を直接に感じていたのだ。

この激しいコントラストの様を歴史家ホイジンガーは、名著『中世の秋』のなかで、次のように述べている。

「生活はけばけばしく多彩で、まるで血の匂いとばらの薫りを一緒に吸い込むようなものだった。民衆はさながら子供の頭をもった巨人のように、地獄の不安と全く無邪気ないたずら心、残忍極まる冷酷と涙もろい情け心の間を行き来した。この世の喜びをすべて否定し去ったかと思うと富と享楽に狂おしいまで執着してみたり、あるいは陰惨な憎悪からニコニコ顔の上機嫌に変わってみたり、つまり極端な生き方をしていた」（『中世の秋』兼岩・里見共訳 河出書房新社 p 40）

そしてまたかつて小林英雄も『平家物語』のなかで同様に、この時代の人々を支配していたコントラストを次のように語っている。

「こみ上げて来るわだかまりのない哄笑が合戦の合図だ。これが平家という大音楽の精髓である。平家の人々はよく笑い、よく泣く。ぼくらは、彼ら自然児の強靱な

声帯を感じるように、彼らの涙がどんなに塩辛いかも理解する。だれもいたずらに泣いてはいない。空想は彼らを泣かすことはできない」（小林英雄『無常ということ』角川文庫 p66）。

残忍極まる残酷さと子供のように無邪気な涙もろさが同居し、激しく泣くかとおもえば激しく笑うといった中世の人々が露にするこういった感情の直截さは、彼らが常に感じていた己の意のままにはならない出来事からの振動、ショックから説明されるべきものである。小林がまことに正確にも聞き取っていた男たちの単純な叫び声は、死から受けるショック、自然が直接に彼らにあたえていた振動なのであった。

自然との衝突、それは確かに死において自覚されるものではあるが、これ以外にも、例えば中世においては生産の現場において、はっきりと知られるものであった。この時代働くことは、常に自然と直接向かい合うことだったからだ。すなわち中世の人々にとって農作業は、現代の大規模農場やビニールハウスにおけるような計画的な労働ではなく、暑さ寒さといった自然に根本的に支配されるものであり、決して己の意のままにはならない出来事だったのである。中世の騎士や武士たちは郷においてはこのような労働に従事し、そこから彼らの権力基盤を養っていたのであり、この意味で、彼らは自然と真っ向から向き合って暮らしていたのであった。

これが近世になると、彼らはもはや労働に直接手を染めなくなる。この分だけ、消費者となった彼らは、自然からの直接的なショックに対するセンシビリティを失っていく。更に彼らは、例えば日本近世の江戸期にあっては、武士道とは死ぬことと見付けたりという形で、死からのショックを美化し、あげくの果て切腹という死の美的企画化の形式を考案した。それは、本来己の意のままには決してならない自然の死を彼らが放棄して、すべての出来事を主観的な企画化の統率のもとにおこうとしたことを意味している。中世の武士ないし騎士は、いまだ自然と共に生きていたのだが、近世に至って彼らは、もはや全く自然との直接的な交渉から離れてしまい、自然からのショックに対するセンシビリティを喪失するに至ったのだ。こうして例えば、『忠臣蔵』には『平家物語』に聞き取られていたような単純な叫び声は、もはや全く聞き取ることができない。『忠臣蔵』に描かれているのは、侍たちの執拗なまでの綿密な計画性、企画性なのである。

主観による企画化の基にすべての存在するものを統率しようとする精神態度によって、厳密な意味での対象は、主観の内部に取り込まれてしまう。すなわち、厳密な意味での客体としての自然は、この精神態度にとってはもはや存在しなくなる。自然は主観の奴隷（クネッヒト）と化するのである。自然は、主観の意のままに操る事ができるようになる。こうして、この精神態度はもはや何事に対しても、本来の意味でショックを受けることはなくなる。このショックに対する麻痺を引き起こしているのが、企画化に限定されてしまった理性にほかならない。企画化を専らとする理性は、ショックアブソーバーとして機能することになるのだ。

デカルトの時代は、しかしながら、こういった企画化に精神が限定されてしまう時代ではなく、未だ中世を十分に引きずったドン・キホーテの時代であり、生の喜びは伝染病や狼による死の恐怖と隣り合わせになっている時代であった。そういう時代の様相を背景にして、デカルトは自分の使命を次のように語っている。

わたしは今の医学を軽蔑するつもりは少しもありませんが、…現在医学において知られているすべてのことが、これからお知るべきこととして残されていることに比べれば、ほとんど無に等しいと認めない者はいないだろう、と確信しています。そして、身体ならびに精神の無数の病気について、またおそらくは老年の衰弱についてすらも、もし、それらの原因と自然がわたしたちに与えている療法とを十分に知るならば、人は、それらを免れるであろうと私は確信しております。…

わたしは、今後学問において自分が為し得ると思っている進歩についてここで詳しく述べようとは思いませんし、また、確かに実行できるとはわからぬなにかの約束を世間にたいしてしようとも思いません。ただ次のことは言うておきたい。医学について今までの規則よりも確かな規則を与え得るような、ある種の自然認識を得ようと務めることにのみ、わたしは、自分の余生を用いようと決心しているのです。（『方法序説』第六部）

随分と先回りすることになるが、「人生に有益な確固たる知識」を得ようと「強い意欲」を持っていた少年ルネは、その人生の紆余曲折を経ながら40歳に至って、上

に見られるような境涯に達し、ようやく中世に別れを告げて、近世的な企画化する合理的精神を築き上げて行くことになる。

4. 異端審問制度

戦争、盗賊、狼、それにらい病やペスト、これらはまさにデカルトの生きた時代の恐怖の的だったが、さらにこれら以上に彼が「周到な注意を払おうと決心し」（前出）なければならなかったのは、異端審問官(inquisitor)たちに対してであった。彼らによってひとたび異端を決せられれば、法服の貴族デカルトといえども火あぶりを免れることはできなかったからだ。ローマ法王の怒りをかったガリレオ・ガリレイが、異端審問官たちを前にして「それでも地球は動く」とつぶやきながらも、1633年、地動説を撤回せざるを得なかったことを、そして、当時37才だったデカルトがこの事件を知って、自作の『世界論』の出版を断念せざるを得なかったことを、思い出さえすれば、わたしたちは、「闇の中を一人行かん」とするデカルトの異常とも思える用心深さの一端でも、感じ取ることができるだろう。このように火刑をも命令することができるほどの絶対的な権力が審問官たちに与えられることになったのは、はるか遠い中世に生じたラディカルで先駆的な宗教改革運動が原因だったのだ。

ずいぶんと回り道にはなるが、ここでもわたしたちは中世に目を転じ、デカルトが最も周到な注意を払おうとした異端審問制度がどのようにして成立して来たのか、そして、その実態はどのようなものであったのかを見ておくことにしよう。序に述べたように、近世がデカルトから始まるとするならば、彼は言わば中世と隣合わせで生きていたのであり、彼が切り開いた近世の時代精神は、この中世と対比することによって、よりはっきりと捕らえられることになるだろう。

さて、この遠い中世という時代、それは経済的に見れば全くスタティックな時代だった。多くの人々は生まれついた村落から一歩も離れることなく、来る年も来る年も朝まだきから夕暮れまで、黙々と畑を耕し家畜の世話をしながら、婚姻し子を産み育て、一生を終えて逝った。一家が食べるだけで精一杯の自給自足の暮らしの中にあっては、交換するに足りるほどの生産物を作り出す余裕はまだなかった。つまり、人も物資も、深い淵にどむ水のようにひとところにとどまって、じっと動かなかったのだ。

わたしたちの生きる時代と比べると、何という違いだろうか。現代では人間も物資も情報も限無く地球上を飛び回り、わたしたちは日々、経験したことのない目新しい出来事に出会っている。常ならざることが、わたしたち現代人の常なることなのである。非常が日常なのだ。そしてわたしたちは、この非常に全く慣れてしまい、もはや驚くこともなくなっている。しかし彼ら中世人にあっては、日々の暮らしはモノトーンの変わることのない日常そのものだったのだ。だからそ彼らにあっては、例えば祭りはあくまでけばけばしく、恋はあくまで激しく、嫉妬はあくまで陰湿だったのだ。

こういう時代において唯一の文化・芸術の光を放つことができたのは、カトリック教会だった。教会の中で始めて人々は、大聖堂に響き渡る壮麗な音楽を耳にし、ステンドグラスを透かして射し込んで来るまばゆいばかりの光線を目の当たりにすることができたのだ。それは単調な重苦しい毎日の生活からすれば、まことに天上のものと思われなかっただろう。色鮮やかな絵画や重厚な彫刻、そしてきらびやかな装丁の書物、それらもまた教会にしかなかった。知識階級とはいえ、教会聖職者をおいて他にいなかった。彼らはその圧倒的な知識量とこういった芸術作品を通して、まだ文字を知らない多くの人々に、地獄の恐ろしさと天国での美しい生活を教えた。さらに聖職者たちは、「祈れ、そして、働け」という有名なベネディクト修道会のスローガンに見られるように、労働を大いに重視することによって、世俗の人々の模範となり、農作業のやり方や手工業品の作り方までも指導した。つまり中世の人々は、現世の生活においても、また、来世の運命においても教会の指導に全面的に服していたのだ。こうして神の代理人たるローマ法王を頂点とし、個々の村々を独立の経済単位とした中世欧州連邦国家とも言うべき体制が整っていった。

世俗からの尊敬を一身に集めたカトリック教会が、権威をもって十字軍を指導しながらその勢力の絶頂期に達していったとき、一方で、聖職者たちの腐敗と墮落もまた目に余るものとなっていく。かつて服従、清貧、貞潔を誓い、神の前でひたすら己を虚しくするよう勤めていた聖職者たちの内のある者は、いつしか、きらびやかな衣装を身にまとうようになり、魂の救いは金力と権力次第ということになり、そしてついに懺悔室は誘惑の場と化したのだ。

こういった状態の中、ノルマンディーの首府・ルーア

ンの峻厳な大司教であったウッド・リゴーは、カトリック各司教区の調査旅行を行い、べろべろによっぱらった修道僧たちが畑を踏み荒らして狩りに夢中になっていると、その『日記』に記している。彼らはまた尼僧院にも殺到し、かつては静寂の支配した祈りの場は、今や、快楽の場と化したのだった。「尼僧どもは、彼らと相手かまわず夫婦気取りで暮らし、いたるところで、修道僧たちがしでかしたものを腹の中に宿している」（ミシュレ『魔女』篠田浩一郎訳 岩波文庫（上）P 94 参照）。

このようなローマ教会の墮落しきった状態を前にして、キリスト教の真髄を復興しようとする運動が、南フランスのアルビーやトゥールーズの町を中心に生じた。彼らは、原始キリスト教への激しい回帰の思想と潔癖な倫理観を持ち、カトリックの教理を公然と批判して、教会維持税の支払いを拒否した。こういった明らかな現体制の動揺の事態を目の前にして、時の法王イノセント3世（在位1198～1216）は、トゥールーズで法王使節が殺されるという事件をきっかけに、異端討伐のための「アルビー十字軍」を組織し、ここに、石打ち、首吊り、首切り、火刑などによる大量虐殺の戦いの幕が切って落とされたのだ。

この戦いがアルビー派の壊滅に終わったその数年後、イノセント3世を継いで法王権の全盛時代を維持したグレゴリウス9世（在位1227～1241）は、ヨーロッパ各地の異端運動を更に徹底的に抹殺しようとして、ドミニコ会士に法王代理人としての絶対権限を与えた。こうしてアルビー十字軍の虐殺よりはるかに陰惨な、拷問による異端審問裁判が開始されるのである。先に述べたウッド・リゴーが修道僧と尼僧たちの乱痴気騒ぎをその『日記』に記していたのは、このころだったのだ。

そもそも異端審問裁判は、ある何等かの宗教的な考えかたがカトリックの教義に違反していないかを判断するものであり、この意味では純粋な教義論争であった。しかし1318年2月27日、ヨハネス22世が魔女裁判を開始せよという教書を発表して以来、この教義をめぐる裁判は変質し、思想を裁くのではなくある種の行為を裁く刑事裁判となっていく。その行為とは、呪術によって農作物を枯らしたり、家畜を殺したりするといったこと、また、薬人形やろう人形に釘を打ち付けて人を呪い、性的不能に陥れたり、あるいは、その人を呪い殺すといった類いのものである。こういった行為が「魔女行為」と考えられ、異端審問裁判で取り上げられ処罰の対象となっ

たのである。

この時代はちょうど、これまで絶対的と思われて来た法王権力が、十字軍の失敗を契機に、その威信を失墜し始めて行くときであった。フランス・カペー朝の王・フィリップ4世（在位1285～1314）の取った政治戦略は、まさにこの時代傾向に合致していた。彼は、十字軍の失敗と共に没落していった封建諸侯に代わって、世俗の権力を一身に集め、その王権を更に拡張することを目論んだのである。このためフィリップは、聖職者にも課税して、彼らの超世俗的な権力をも自分の支配下に置こうとしたのだ。この目的遂行のため彼は、法王ボニフェイス8世を監禁し、代わりにクレメンス5世を法王に仕立てあげて、1309年、教皇庁をアヴィニョンに移してしまった。これが有名な『アヴィニョン捕囚』である。その後ローマにも教皇庁が立ち、両者の間に世俗顔負けの言わば泥試合が繰り広げられる。カトリック教会の権威は文字通り地に落ち、この混乱がやがてルターやカルヴィンによる宗教改革を経由し、ついには西ヨーロッパ全土に荒れ狂ってドイツを荒廃の極みに引きずり込む30年戦争へと至って行くのだ。後にデカルトは「そのころわたしはドイツにおりました。今なお終わっていない戦争（1618～1648までの『30年戦争』）に心引かれて、そこに行っていたのです」（『方法序説』第2部）と語りながら、この戦場付近に姿を見せることになる。

さてこうした状況の中、ヨハネスは、法王選挙をめぐる陰謀と身辺の危険にさらされていた。彼は、常に暗殺の危険に脅え、自分の命をねらっていると疑われる者たちに魔女の嫌疑をかけて、異端審問官たちに命じ、これを逮捕させた。ヨハネスは、彼らに拷問による尋問を許可し、容疑者たちはこれに耐えられず、ついに自分達が魔女であることを「自白」したのだ。彼らは火あぶりに処せられ、うずたかく積まれた薪のなかで息絶えていった。

こうして拷問による裁判が開始された。指の間に締め具を当て木ねじで締め付ける「指責め」は、時に骨をも打ち砕き、血はほとばしり出た。後ろ手に縛り上げたまま天井に吊す「縛り上げ」、そしてこのロープを突然緩めて床すれすれで停める「吊り落とし」によって、関節はバラバラにはずれる。すねに締め具を当てがい、骨の碎けるまで締め上げる「骨砕き」、「爪剥ぎ」とその剥いだ爪痕に針を刺す「針刺し」。真っ赤に熱せられた靴をはかせる「鉄の靴」。その上からハンマーで打ち付け

る「打ちつぶし」．「焼きゴテ」．拷問室は獣のような悲鳴と唸り、そして肉の焼ける匂いに満たされた。

こういった拷問に耐えられるものがあるだろうか。「うわさ」や「密告」、それに拷問による「証言」によってひとたび魔女の嫌疑をかけられた者は、異端審問官の尋問通りに答えない限り、いつまでもこの地獄の苦痛がかけられたのだ。異端審問官たちには、魔女の財産を没収する権限が与えられており、「教会法が強力な所では至るところ、妖術の訴訟がはびこり、聖職者に富をもたらしていた」（ミシュレ『魔女』篠田浩一郎訳 岩波文庫下 P 46）

白状しろ、そうすればせめて、絞め殺してから焼いてやる。ついに被疑者はたまりかねて「真実」を語り出す。裁判官様のおっしゃるとおりです。わたしは悪魔と結託し、体中に軟膏を塗ってからホウキに乗って空を飛び、魔女の集会・サバトに加わりました。わたしは悪魔の臀部に接吻し、それから悪魔と交わりました。さらにわたしは、少年の死体を墓から掘り出し魔法の薬を作るのに使いました。するとその夫が言う。墓地に行ってください、子供はそこにいるから。子供は確かに棺の中にいた。しかし裁判官は自分の目で確かめたことに反して、これは見せかけであり、悪魔の与える錯覚であると決めてしまう。事実そのものよりも女の自白のほうを選ぶのだ。（同上書 p 47～48 参照）女は、そのうえ、裁判官の言うがままに近隣のだれそれも一緒に、サバトに出席していたとしゃべってしまう。

こうして例えば「ジュネーブでは、1515年、3カ月間に500人の魔女が焼き殺された。ドイツ皇帝カール5世（1500～1558）は…（処刑者からの）財産没収を禁止したが、それはむだであった。小国の領主で同時に司教の職にある者たちは、妖術が最良の収入の一つとなるので、猛り狂ったように焼き続ける。バンベルクのような目にもとまらないほど小さな司教区で、一度に600人が焼き殺され、ビュルツブルクでは900人が焼き殺された」（同上書 p 47）「考えてもいただきたい、つんざくような叫び声、動物の吠えるような声、その中で見るも恐ろしいさまに煮えたぎっている肉と脂の山の中から出る黒い煙を、その恐怖を」とミシュレは語っている。（同上書 p 51）

ちなみにビュルツブルクは、今では中世的なメルヘンの雰囲気を残した観光の町である。石敷きの狭い通りの両側には、花々に囲まれた小さなホテルやお土産屋が立

ち並び、そこを突き抜けると、町の中心地に当たる広場に出る。その近くの館の一室に、重々しく冷たい鉄の責め道具が、展示されている。かつての拷問室だったのだろうか。嘆願する声、叫ぶ声、吠える声が聞こえて来るようで、背筋が寒くなったことを、わたしは今でも覚えている。

こうして魔女狩りの嵐は猛威を奮い始める。1596年、つまりデカルトの生まれた年、ロレーヌ地方の首府・ナンシーの裁判官レミーは、それまでの16年間に800人の魔女を焼き殺したと証言した上、次のように語っている。「わたしの正義はあまりにあまねきため、昨年は16人がわたしの手にかかる前に、みずから死んでいった」（同上書 p 53）ひとたび嫌疑をかけられた者たちは、予想される苦痛を回避するため、自ら少しでも楽に死ぬことを望んだのだ。そしてこの同じ1596年「アルサスの町アラマンでは1年間に200人以上、ラプルーでは4カ月間に600人（1609年）、ストラスブルクでは5,000人（1615～55）、ビュルツブルクでは800人、バンベルクでは1,500人」が「あるいは絞殺されたうえで焼かれ、または生きながら焼き殺されていった」（森島恒雄『魔女狩り』岩波新書 p 6）

要するに、異端撲滅運動は、自分とは思いを異にする者たちを排除する精神構造に端を発しつつ、ついには、教義をめぐる言論闘争の域を越えて、有無を言わさぬ排除そのものと化したのだ。これが宗教戦争の燃え盛る1600年を中心に、すなわちデカルトの生きた時代を中心に、その前後1世紀にわたって狂気のピークに達したのである。ガリレオが宗教裁判にかけられてその主張を撤回し、これを見てデカルトが自分の著書の出版を断念したのは、この嵐の真っ最中だったのだ。

わたしたち人間が真に残忍であり、苛酷であり、不寛容であることができるのは、自らが残忍であるとも、苛酷であるとも、また不寛容であるとも、全く思っていない場合である。狂気に気づかぬこと、これが狂気だ。このときわたしたちは、愛情、勤勉、聡明を人に説きながら、まさにその熱烈な愛情、息つく間もない勤勉、伶俐透徹した聡明をもって、徹底的な残忍、苛酷、不寛容を実行することができるのだ。魔女裁判はその典型だった。こういった人間のアンヴィヴァレンツな有り様は、はるか中世に生じ、近世の初期にはすっかり下火になったわけでは決していない。ドイツ人たちがおこなったユダヤ人虐殺や、わたしたちの父や祖父たちがおこなった中国大

陸や朝鮮半島での残虐な行為といった大きな出来事を引き合いに出すまでもなく、実は、わたしたちは日々の生活の中で、それと気付かないまま、小さくとも鋭い残忍、鋭利な苛酷、憎しみを込めた不寛容に陥っているのだ。つまり小さな狂気に陥っているのだ。小さな狂気と言えども、狂気には違いない。

遅刻する生徒を締め出そうとして重い校門を勢よく閉め、生徒を挟み殺してしまった事件、これはまだ記憶に新しい。人々はこぞってこの教員を非難し、また、このような事件を生み出す学校の体質を非難した。なるほど非難することは簡単だ。しかし、わたしたちが同時に思い起こさなければならないことは、わたしたち自身がこの教師と同じことをおこなってはいないかということ、すなわち、勤勉のあまりにそれと知らず残忍、苛酷、不寛容に陥ってはいないかということである。

一生懸命に講義するわたしの前で眠ってしまう学生に対して、わたしは暖かい眼差しを向けることができるだろうか。わたしの努力を冷やかに見つめ、あるいは、陰口をきき、ときには結託して足を引っ張る教員たちに対して、わたしは思わず復讐を考えたりしないだろうか。「復讐するは我に有り」と聖書に語られているその「我」とは、決してこの「わたし」のことではなく、「神」のことだと言うのに。そしてこの世は「忍土」であるとも言われているのに。

実はわたしはいつも、自分が真・善・美という「根源的な価値」になんらか与かっていると考え、その与かっているわたしの有り様を称賛されたくて、ウズウズしているのではないか。つまり、『真』を見いだす聡明な人だと言われたくて、『善』を行う勤勉な人だと言われたくて、さらには、『美』を感知することのできる情のこまやかな人だと言われたくて、ウズウズしているのではあるまいか、そのために、わたしは、わたしを称賛する者だけとつるんで、それが追従、お世辞であるとも気付かぬまま、お山の大将の気分になっているのではあるまいか。そしてその逆に、わたしを非難する者に、いつか目にも言わせてやろうと、冷たい情熱を燃えたぎらせ、虎視眈々、びたりと狙いを定めるのではなからうか、要するにわたしは、わたしを称賛せぬ他者、非難する他者、裏切る他者、忘恩の他者を徹底的に排除しようとしているのではないか。とすればわたしもまた、「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」の思いに燃えて常に非難の剃刀を研ぎすまし、博識を縦横に我田引水して、自己を正当化する

唯我独尊の人々と同じ状態に陥っているのではあるまいか。こうしてわたしは、それと気付かぬまま魔女狩りの狂気に陥っているのではあるまいか。

こうした事態が生じるのは、一重にかかって、この世の中には「価値が有る」と考えるからである。そしてその価値を自分は分有していると考えた所に、この分有を確認することによって、自己を正当化し、アイデンティティーを設定しようとする姿勢が生じるのだ。

しかしこの穢土の世においてはたとえ「価値が有る」としても、その価値を真に透徹することが人間にはできるのだろうか。「すえとをりたる大慈悲心」(親鸞『嘆異抄』岩波文庫p47)が、生身のわたしたちに可能だろうか。かえってわたしたちは、たやすく魔女狩りの狂気に陥ってしまうほどに、この世においては反価値的な生き方しかできないのではないか。わたしたちは、この娑婆においては価値を体現する偉い人間としてではなく、一切価値を為すことのできない邪魔者としてしか、有り得ないのではないか。

異端審問裁判官たちは、しかし、そうは考えなかった。彼らにとって、神は、すべてのものが有ることの原因として、厳然として有るもの、存在そのものであった。彼らはそのような神に自分が最も深く結び付いていると考えたのだ。ここに彼らの唯我独尊の根っこがあった。異端とは、存在そのものたる神から発する真・善・美の価値を破壊することだ。そして、これらの価値を破壊することは、人間をもはや人間ではないものにし、すなわち、人間を悪魔に手渡し、地獄に導くことだ、自分たちこそこれを防がねばならない、と彼らは考えたのである。こうして彼らの独善的な魔女狩りが始まったのだ。

デカルトもまた後になって、彼らの格好の餌食にされることになる。後に詳しく述べるが、デカルトはその著『省察』のなかで有名な「欺く神」について述べ、これが不敬虔の罪に問われて、危うく異端裁判にかけられようとするのである。「ヨク隠レシ者が、ヨク生キル」というオヴィディウスの言葉を座右の銘として、「闇の中を一人行く」ように必死なまでに注意深くオランダ各地を転々と移り住んだデカルトは、「勤勉」で「聡明」な異端裁判官たちの鋭い眼差しに取り囲まれていたのだ。

デカルトは防戦する。異端裁判官たちの鋭い論理に対して、一点誤ることなく理論武装する。「コギト エルゴ スム」から出発しながら。

はたして彼の論理は、「寛容」に行き着くであろうか。